

# 仕合わせの和



第197号

H. 30. 8. 1

(毎月1日発行)

袖振り合うも他生の縁そでぶ たしよ

住職 谷川寛俊

表題の「他生の縁」を「多少の縁」と思っている方が多くいらつしやるようです。私も事あることによくお話しさせて頂きますが、「多生の縁」と書く場合もあります。これは何回も多く、この世に生まれ変わりたいという願望からくるもので、正しくは「他生」という字を書きます。これは仏教的な考え方で、私達は過去世、現在世、未来世という三世にわたる命を生き続けています。

『他生』とは字の如く、「他に生まれたい時」という意味になり、前世、つまり生まれる前の世界の事を言います。よく世間では「はじめまして。私はこういう者です」と言つて、名刺交換などをされている光景を見かけますが、実は今日ここでお目にかかれたという事は、生まれる前の世界(過去世・前世)において、あなたと私は既にお目にかかったことがあったのです。その時のご縁で、再び今日ここでお会いすることが出来

たというわけです。

小学校の先生だった無着成恭(むちやくせいきよう)氏はある時、子供達とつくしを摘みに行きました。つくしを摘みながら、子供は皆「つくしは、繋がっているよ」と歓声をあげたのです。大人達は、つくしを摘むことに熱中していたのですが、子供達はつくしの根っこは、どこまで続いているんだろうと掘り始めました。その根っこは隣のつくし、またその隣のつくしにも繋がっている事を発見して歓声を上げたのでした。

見えないところで手を繋いでいるつくしの根は、地中深くまで縦横無尽に張り巡らされていて、畑に生えたつくしは、いくら取つてもあちこちから次々に芽を出してきます。

かつて原爆が投下された広島に縁が戻るには、50年は掛かるであろうと言われたそうですが、そんな死の大地の広島に真つ先に芽吹いたのは、このつくしだったと言います。根が地中深く伸びていたから、大地がシェルターの役割を果たして、熱線から免れることが出来たのだろうというのですが、

「仕合わせの和」  
と打ち込んで頂ければ、ホームページにつながります。  
編集・発行 玉蓮山 真成寺  
編集部 谷川久仁子  
TEL・FAX 0765-22-2268  
携帯 080-3744-2523  
こちらの番号でもお寺につながります。

見渡す限りの焦土に芽吹いたつくしを見て、広島の人達はどうなにも勇気づけられたことでしょうか。道を歩いていて、ただ袖が触れ合っただけの小さな出会いも、それは決して偶然のことではなく、深い縁によることだといえます。言うなれば、目に見えぬ所で手を繋ぎ合っているつくしのようなものと言つたら良いかもしれません。

詩人のをさ はるみさんの『独り言』という作品に「私が私になる為に、人生の失敗も必要でした。無駄な苦心も骨折りも、悲しみも、みんな必要でした。私が私になれた今、すべてあなたのおかげです。恩人たちに手を合わせ、有り難うございますと、ひとりごと」。私が私になる為には、あの時の苦しみも、悲しみも、何もかもが必要だったと詠っています。また「人に出会えて人は人になる」の一句は、人生の中で出会った全ての人に言える事であつて、いわば私が私になる為の掛け替えのない「他生の縁」であつたといふべきか

もしもありません。今月はお盆月です。父母、御先祖様を偲び、そして自らのルーツを考える絶好の機会です。心新たに、真成寺の御堂で手を合わせ御先祖様を偲びましょう。どうぞ、ご参詣をお待ち申し上げます。

